

揺れる国際秩序

冷戦は米ソ両超大国による核戦争の危機を常にはらんでいた。第一次・第二次大戦のような「熱い戦争」ではないが、中東やベトナムでの局地戦を交えた、形を変えた世界大戦だった。

しかし、米ソは互いが「最大の敵」でありつつ、実は「最愛の敵」同士だったとも言える。両国間には時に一触即発の状況に直面しながら、ぎりぎりのところで抑止し合う論理が働いていた。イデオロギーは違っても似たような国家理性を持ち、超大国であることによって得られる利益に互いに自覚的だった。米ソ対立には「不均衡の中の均衡」があった。米国の「核の傘」や日米安保条約に保護され、経済成長にまい進できた日本は、ある意味では冷戦の「受益者」だった。

ところが、ソ連解体でユーラシア大陸の政治力学が不安定化した。「国家対国家」という枠組みでは制御不可能な

わかり合える関係 再構築を



山内昌之氏（歴史学者）

やまうち まさゆき
1947年生まれ。歴史学者。東京大名誉教授、武蔵野大特任教授。カイロ大客員助教授、ハーバード大客員研究員、東京大中東地域研究センター長などを歴任。専門は国際関係史、中東・イスラム地域研究。

形で民族対立や対イスラム社会という問題が表出し、その流れのなかで湾岸戦争やアフガン戦争、「9・11」（米同時多発テロ）などが起きる。後の過激派組織「イスラム国」（IS）などイスラム原理主義の問題がグローバルな危機要因になるのも冷戦終結とソ連解体後の現象だ。

冷戦後、米国の「一極支配」が続く可能性もあったが、米国は湾岸戦争やイラク戦争で国力を消耗した。イラク一国を破壊することが国際秩序にどのような影響を与えるかを見誤り、超大国として蓄えてきた影響力と信頼感を失ってしまった。

今、かつてのソ連に代わり得る力を持つ存在として浮上したのが中国だ。しかし、米中は米ソのような「わかり合える関係」にはない。中国は自国の利益を強調するだけでなく、米国に対して何を譲り、何を守るべきかについて国際的に説得力をもつ論理を語ることができない。共通の土壌がないからだ。ソ連は共産主義国家だったが、キリスト教や哲学思想などを軸に西側と共通する歴史的な基盤を持っていた。米ソはナチス・ドイツ

と戦った経験も共有する。しかし、中国には長大な歴史を背景とする独自の「歴史のある文明」があり、「歴史のない文明」である米国の差異は我々が考えている以上に大きい。米国のトランプ大統領も中国の習近平国家主席も国際協調を大切にしているとは言いがたい。だが、米中で妥協や調和を図らない限り、安定した調和的な国際関係は成り立たない。

現在の国際情勢は極めて混乱しており、しばらく世界は試行錯誤を続けるだろう。それでも、冷戦終結後の新たな時代として現代を前向きに捉え、中国にも自由や平等といった普遍的価値観に少しでも接近させながら、共存協調の国際秩序を再構築していくしかない。その基本条件は、自国第一主義を排するリーダーを生み出し、安定した平和主義的世論を各国に定着させることである。

【聞き手・岩佐淳士、写真も】